



恵みありて、インジェラに集う ——エチオピア正教徒の食をめぐる生活誌——

上村 知春 著

横浜 春風社 2023年 518+xx p.

本書は、エチオピア北部に住むアムハラの人々の食生活を丁寧に調査したエスノグラフィーである。著者の博士論文をもとに加筆修正されたものである。調査地はアムハラ州のエチオピア正教徒が多く居住する地域である。本書は、そこに居住するアムハラの人々が実践している豊かな食生活を紹介している。

序章、終章を除いて14章の構成となっており、大きく分けると、食材や料理ごとに詳細な説明のある前半（3章～9章）と、調理する人々、食する人に注目した後半（10章～14章）となる。前半で取り上げるのは、アムハラの人々の主食である「インジェラ」、地酒、インジェラ以外の穀物を使用した料理、動物性食品そしてコーヒーである。著者の観察や人々との会話を紹介しながら、収穫から始まって食事の準備や食事の風景まで生き生きと活写されている。より正確な情報も先行研究に依拠して補足されており、読み進めるなかで生じる疑問にも逐次答えてくれる。

後半では、食文化や価値観についてふみこんだ分析へと進む。アムハラの人々はなにをおいしいと評価するのか、なにが体に良いと考えるのかといったテーマから人々の価値観の解明を試みている。また、調理のやり方についても、だれがなにを担当するのかに注目して、ジェンダー関係だけでなく家族間の関係についても考察している。著者が調査地の人々と生活をともにし、観察や会話を通して得た知見をふんだんに紹介することで、人々が料理を提供してくれる人と食そのものにどのように対しているのかが鮮やかに浮かびあがってくる。また、エチオピア正教に関連したパンや聖水、祝祭日に関連した食習慣も興味深い。

食は単に栄養摂取のためだけではないということを、本書は改めて認識させてくれる。詳細な食生活の記録は貴重であり、アムハラにおけるさまざまな食材、料理、地酒などについて丁寧に説明されている。アムハラで調査をしている評者が気になっていた料理なども、たちどころにわかるようになっており、興味のある章から読み始めることもできる。ただ、エチオピアの人々は食に保守的だと言われるが、現在、変化しつつある食生活についての言及があまりないのが残念である。本書でも触れているが、都市部を中心に、米食や米を使ったこれまでとは異なる料理が浸透しつつある。農村部ではまだ大きな変化は生じていないのかもしれないが、今後どのように変化していくのかについては、著者による追跡調査を期待したい。

児玉 由佳（こだま・ゆか／アジア経済研究所）

